特 240
519

262

ダイヤモンド社長 石山賢吉著

金持に學ぶ

今日の問題社製行

十錢

始

特240
519

金持になる學ぶ

石山賢吉著

今日の問題社版

帝國圖書館藏

東京市内で一番よく賣れる

讀賣新聞

朝刊十二頁
夕刊四頁
(但水曜土曜は八頁)

東京銀座
讀賣新聞社

目次

一、金持に何を學ぶか……五
二、銀行家と大金持の惱み……七
三、けちといふことは……一〇
四、けちの眞髓を行くもの……一三
五、金持の金の使ひ振り……一六
六、物を大切にすること……二〇

七、株で金持にはなれぬ……二三
八、運・根・鈍の解釋……二五
九、辛抱といふこと……二九
一〇、誤魔化しはきかぬ……三三
一一、けちといふことに拘泥するな……三六

金持に學ぶ

石山賢吉

一、金持に何を學ぶか

それは先づけちといふことだ。金持はけちである。百人が百人までけちである。若しけちでない者があれば、それは親から金を貰つた金持である。親讓りの金持には學ぶことが少い。

稀れには親譲りの金持でも學ぶ可き人がある。例へば福澤桃介さんの伜の駒吉さんの如き、この人などは堅實な事業家で、其の點はお父さん以上である。

かういつた人もあるけれども、大概金持の子は、唐様で書く三代目で、貸家札を貼るのが普通である。

奮闘して自ら金を溜めた人、これには學ぶべき點が多い。

その中にも最も學ぶ可き點はけちである。

けちと言ふと、何だか悪いことのやうに聞える。事實、世間ではけちな人を悪者扱ひにしてゐる。

處が、金と云ふものは、どういふ所に出すべきもので、どういふ所に出すべからざるものかといふことは、頗る區別が難しい。

三井でも三菱でも大番頭の一番むづかしい仕事は、どれだけ金を寄附したらいいかといふ事だ。

福澤桃介さんが、かつて故團琢磨氏を評して、

『三井の團さんに、惱みがあるとすれば、それは恐らく、寄附の捌きをする事であらう』

と。

三井や三菱に金を貰ひに行く者が一年に何程あるか知れない。

無論これを捌く專門の番頭さんが何人もゐる。大概の事は其處で捌くが、大きな事になると、理事長の處へ行く。これを値切れば悪く言はれるし、言ふ通りに出せば際限がない。それをうまく捌くのに、言ふに言はれぬ苦心があるさうだ。

詰り茶代の惱みを大きくしたのが寄附の捌きである。

二、銀行家と大金持の惱み

金を貰ひに行く人は呉れさへしなければけちだと言ふ。自分の要求は正當のものと信じ

ゐる。

貸たしい奴に銀行が金を貸さないと言つて銀行を怨む。銀行は人の金を預つてゐるのだから、無闇に貸せない。貸せば倒されてしまふ。斯くては預金者に申譯がない。其處の道理を考へないで、銀行が金を貸さないと言へば、銀行を怨む。世間は銀行と金貸しとを混同してゐるのである。

自分の資本を貸す金貸しは自分の肚一つで大膽な貸し方が出來る。銀行は預つた金だから、そうは行かない。でも、貸さねば人に怨まれる。

そこで銀行家は非常に世間を狹く渡つてゐる。倶樂部などへ行つて交際しないやうにしてゐる。話をして少し懇意になると、すぐ金を貸せと來る。それを斷るのがいやさに交際の範圍を狹くしてゐるのである。

これが銀行家の人知れぬ苦しみである。況んや大金持に於てをやである。

大金持で人と頻繁に交際してゐる人は、一人もない。倶樂部などへ出入してゐる人は殆

どない。

若しありとすれば、それは實權のない、名ばかりの金持である。例へば三井の殿樣のやうなものである。

三井の殿樣は、大金持ではあるけれども、自身で金が自由に出來ない。貧乏人と同じである。こんな殿樣にいくら寄附を申込んでも一文も呉れない。又、それを知つてゐるから貰ひに行き手もない。

三菱の主人の岩崎さんは、絶對に他人と交際しない。見方に依つては、體のいい監獄に入れられたやうなものである。社會と交渉をしないのだから……。

考へがあつても意見の發表は出來ない。すれば金持の樂にこんな事を言つてゐるといつて、囂々の非難が起る。

金持といふものは、實に窮屈なものである。決して樂やむべきものでないと私は思ふ。

我々が幸福か、三井三菱の御主人が幸福か、といふことは、餘程疑問だと思ふ。

三、けちといふことは

話は少しわき道にそれたが、さて本題のけちと言ふ事。

けちと言ふ事は、金を大事にする事、金を矢鱈に出さぬといふことである。けちな人は金を綺麗に出す人より悪いかも知れない。けれども、金を浮かす人に比較すれば、それに優る事萬々である。

けちにすれば金が溜る。金が溜るといふことは、即ち、資本が蓄積されることである。資本が蓄積されるから、色々文明の建設が行はれる。資本のない國ほど、哀れなものはない。

支那を見よ。

支那には先づ第一に國防がない。だから、外國人に虐められ通しだ。さうして内亂に内

亂を重ねてゐる。文明は一向に向上しない。

昔開けた國で、歴史を穿鑿すれば、日本などよりも幾十倍も進歩して居るべき筈なのが中絶して、資本の蓄積を怠つたために、今はみじめな有様である。

又、エチオピヤだつてさうだ。如何に伊太利の暴虐を憤慨しても、裸で戰爭しては勝てない。戰へば戰ふほど、近代武器の犠牲となるばかりだ。日々の伊エ戰報は、我々に無資本國の悲哀を如實に示してゐる。

私は、新潟縣の小さな町に生れた。

私が子供の頃に、我が町に日本樂天往生といふ人がゐた。この人は、我が[illegible]の[illegible]家であつた。卑賤から身を起し、我が町の如き貧乏町に、十萬圓からの金を溜めたのだから、實にえらい蓄財家である。

この隣に、漢學の先生が住んでゐた。この先生は、けちといふことが大嫌ひであつた。それだから、朝から晩まで隣の蓄財家を非難してゐる。

『あんなけちな奴はない、彼奴は泥溝の中から、古下駄の齒を拾つて、焚き物にしてゐる』

と蛇蝎の如くに言ふ。私は、その先生の所へ漢學を習ひに行つてゐた。それで度々お説り攻撃論をきかされる。當時尤もだと思つた。泥溝の中から古下駄の齒を拾ひ上げて、焚物にする奴は、荒神様のお答めでも受けるものと思つた。

ところが、今日になつて考へて見ると、それは全く間違つた非難であつた。泥溝の中から古下駄の齒を拾ひ上げて焚けば、廢物利用である。國家の富を無駄にしない經濟上の善行である。それを、どういふ譯で先生が非難したのか、理由が解らない。尤も、その先生は經濟の思想がゼロであつた。東洋流の豪傑的思想をたぶんに持つた人であつた。蓋し、泥溝上げの非難は、それから出たものかも知れない。

日本には、東洋流の豪傑的思想を持つた人が多いためか、古來物を大事にすることを卑しむ風がある。それは實に間違つた考へである。今日、事業に成功するには、廢物利用が

肝腎で、少しも物を無駄にしない事を心掛けなければならぬ。

四、けちの眞髄を行くもの

玆に一つ面白い例がある。

世界中で酒精を一番安く造るのは、獨逸である。日本でも臺灣で酒精を造つてゐる。これは糖蜜を原料にする。糖蜜は砂糖を造るとき出る廢物である。之を原料にして、各製糖會社は酒精を造つてゐるのだ。

だが、餘り安く出來ない。只の原料で造るのだから、安く出來さうなものだが、事實さうなつてゐない。

處が、獨逸は馬鈴薯を原料にする。これは國民の食料であつて、無論廢物ではない。それで、どうして酒精が安く出來るか。

獨逸では、馬鈴薯畑の眞中に、酒精工場を造つてゐる。出來た馬鈴薯は、よいのを選擇して食料に賣り、屑を集めて酒精の原料にする。

そして酒精を造る際に出る炭酸瓦斯は、パイプで畑に導き、作物の榮養劑にする。人間は酸素が必要だが、作物は炭酸瓦斯が必要である。だから、パイプで炭酸瓦斯を導いてやると畑の作物がよくなる。

それから酒精の搾粕は豚に食はす。酒精の原料に出來ない莖も、葉も、根も、悉く豚に食はす。それだから、酒精工場の側には豚小屋が澤山出來てゐる。かうして成長させた豚を今度は屠殺し、肉は無論食用にする。而もその食用も日本の如く生肉ばかり賣るやうな馬鹿はしない。一部分は貯藏に堪えるハムにする。

それから、腸は腸詰にする。血液は染料にする。肥料にもする。皮や毛や骨は、皆細工物にする。棄てる所は一つもない。さうしてそれから得たものを悉く酒精原價の引下げに用ゐる。

それだから酒精のコストが安くなるのだ。實にけちな遣り方である。其のけちが獨逸の酒精製造を成功させるのだから、それは實に尊ぶ可きけちである。

石炭も亦然りである。

石炭は一名金の成る木といはれてゐる。これを化學的に利用すると、種々雜多な物が出來る。さうすれば、石炭の價値が非常に高まる。

石炭を山から掘り出して其の儘焚いてしまふと、高々八九圓の値打にしかならぬ。處がそれに一應の乾溜を施し、瓦斯、コークス、コールタールと分けて使ふと三十圓位に高まる。

更に其の分けた瓦斯、コークス、コールタールを原料にして化學製品を造ると、百圓位になる。即ち、石炭の儘の十倍以上になるのである。

昔は、石炭を石炭として使用することだけしか知らなかつた。處が、科學の進歩に從つて、それを分解して各種の化學製品を造る事になつた。

現に九州の大牟田へ行くと、同市に三井の事業が澤山ある。それは悉く石炭を原料にする化學工業會社と、それに附屬した事業會社である。三池鑛業所を始めとし、三池窒素、三池染料、東洋高壓、三池製煉所などがそれであるが、是等の會社は皆な石炭から生れたもので、一種の廢物利用會社である。

近世の事業は、廢物利用が巧みでなければいけない。そこを巧みにすると否とが、成功不成功の岐れ目になつてゐるのである。

五、金持の金の使ひ振り

世の金持を見るに、彼等は立派な家に住んでゐる。立派な着物を着てゐる、立派な自動車に乘つてゐる。さぞ彼等は、金なんか何とも思はないであらうと想ふと、それは大違ひである。

例へば、御飯時、自動車を待たせると、運轉手に御飯を食べるお金をやる。一圓呉れる人と五十錢呉れる人とある。一圓呉れる人は、餘り自分で金なんか儲けたことのない人である。自分が働いて大金持になつた人は五十錢しか呉れない。それは、それでよい譯だ。運轉手が其の邊で一寸御飯を食ふのに一圓掛る譯がない。五十錢やれば十分だと思ふのである。自分達だつて、大したものを食つてゐない。

朝は家で輕い朝飯を食ひ、晝は倶樂部へ行つて一圓の定食を食ふ。倶樂部の定食にはAとBとがある。Aが一圓二十錢で、Bが一圓であるが、誰もAを食はない。皆Bを食ふ。それで澤山である。

先代安田善次郎翁が、或時お供を一人連れて田舍へ旅行した。さうして或る掛茶屋に憩んだ。立つ時お供の者が、

『茶代は幾ら置きませうか』

と問うたら、

『五錢置け』

と言つた。少し行くと、又掛茶屋に憩んだ。立つ時供の者が、

『やはり五錢でよろしうございますか』

と問うた。處が今度は、

『十錢置け』

と命じた。さあどういふ譯で五錢、十錢の差をつけるのか、供の者は分らない。

宿に着いて晩飯の時、供の者が其の理由を問うた。すると善次郎翁の言ふには、

『前の茶屋はお茶の出し殼を出した。後のは入替へて出した。それだから十錢奮發したのだ』

と。大金持になつた人は、かういふ風に金の使ひ方に氣をつけるのである。

それからもう一つ。

三菱の大番頭に莊田平五郎といふ人があつた。この人が北陸の鐵道大會に行つて歸りに

福澤桃介氏と汽車の中で會つた。いろ〳〵な雜談の末に、

『君、茶代といふのは幾ら置いたらいいのかね』

と、問うた。すると福澤氏は、

『彼所の宿屋は、私は十圓置きますが、あなたは五圓でいいでせう』

と答へた。莊田氏はその理由が分らない。

『どうして君、君と俺とに差をつけるんだ』

と反問した。福澤氏は、

『私は我儘だから宿へ着くと女中をこき使ふ。あなたは自分で自分の始末をする人で、手紙を書けばワザワザ帳場まで持つて行く人だから五圓で澤山です』

と說明した。詰り、金持でも、無駄を嫌ふから斯うした茶代問答も起るのである。從つて金は仲々出さない。

又、出さぬから、金持になつてゐられるのである。出せば金持でなくなつて仕舞ふ。

金持に金を出して呉れと言つて行く人は、大概金を使ふに下手な人である。金持はさういふ人に金を遣はせるより自分で金を遣つた方がよいと思ふ。それで一層金を出さない。

六、物を大切にすること

私のよく言ふ話だが、王子製紙の社長の藤原銀次郎さんと、十年ばかり前に三週間ばかり旅行したことがある。この時、藤原さんが物を大切にする人であることを知つて、つく〴〵感心した。

あの人は物を食ふ時、決して粗末にしない。卵の半熟が出る、こつ〳〵殻を壊してじわり〳〵殻を取る。さうして綺麗に食べてしまふ。白身の一片も無駄にしない。私等は行儀が悪いものだから、どうも半熟だと、半分位無駄にしてしまふ。半熟と云ふものは食ひ悪いものである。藤原さんは、一つは行儀がいいからでもあらうが、それを綺麗に、叮嚀に

食べる。初めから、殘ると思ふものは箸をつけない。

私は、それを見て大いに感心した。藤原さんは食物ばかりでなく、持物も大切にする。その時、藤原さんは銀時計を持つてゐた。近頃は、又、金時計がすたれて來たが、當時は未だ金時計流行の時代で、皆な金時計を持つてゐた。處が、藤原さんは銀時計であつた。然も、それは特別の銀時計ではなく、若い時買つた古ぼけた銀時計であつた。それを大切に持つてゐる。聞けば二十年もつづけて持つてゐるさうだ。其代り、其の時計には、王子製紙の社長藤原銀次郎の持物として恥かしからぬ裝飾が加へてあつた。藤原氏は外國へ行つた時、勳章を貰つた。それを時計に附けてある。それで其の時計が立派に見えるのであつた。

時計ばかりでなく自動車もさうだ。自動車は、一つ車を十年も乘る。そう云ふ紳士は他にない。氣の短い人は一年、辛抱強い人でも三、四年でやめてしまふ。

處が、藤原さんは修繕に修繕を重ねて自動車に乘れるだけ乘る。實に自動車を大切にす

る人である。

藤原さんの工場へ行つても、その主義が工場にちやんと現はれてゐる。古い機械だつて決して捨てない。飽くまで修繕して使ふ。王子製紙の王子工場へ行くと、明治十年頃の製紙機械が働いてゐる。而も立派に働いてゐる。修繕に修繕を重ね、立派に直して働かせてあるのである。

無論古い機械を使ふことは、工場經營上必ずしもいい事とは言へない。藤原さんは、古い機械は古いやうにして利用し、新しいのは新しいやうにして利用する。必要となればいくらでも金を出して新しい機械を買ふ。だから、決して譯の分らない古い機械の利用者ではない。

然し、其の遣り方はけちである。日本に製紙工場は澤山あるが、藤原さんほど、けちな機械の利用者はない。大概古くなれば見切つて新しい機械に變へてしまふ。それが普通の遣り方である。其の代り、そう云ふ人の會社は藤原さんほど成績が擧らない。

事業經營者は、藤原さんのけちな機械の使ひ振りを學ぶ可きである。

七、株で金持にはなれぬ

金を溜める祕訣は、金を遣はないことに在る。襤褸を穿ち、細を積まねば金持にはなれない。

世の中には、一攫千金を夢みて、株や米の相場をやり、金持にならうとする不料簡な人がある。相場は一時的には儲かる事はある。だが、儲けても又損をする。終りを全うする人は、極めて稀れである。株成金で資產家になつた人は極めて少ない。

日清、日露、歐洲の三大戰爭で、可なり成金が出來た。けれども當時の成金で、今日殘つてゐる者が幾人あるか。偶々殘つてゐる人は、皆な途中で轉向した人ではないか。相場で儲けた金は、飲んだり、食つたり、遊んだりして、湯水の如く使つて了ふ。それだから

終りを全うしないのである。アメリカ邊りでも、相場をやつて大金持になつた者は少いさうである。

この事實を、最も明確に證明するものは、株式仲買店の命數である。仲買の壽命は極めて短い。平均二年前後である。甚だしい時は、それが一年何ケ月に降る。やゝ延びて二年半ぐらゐのものだ。それは時世に依つて違ふ。近年延びて七年になつた。すると、取引所に一千萬圓以上の大穴が開いた。仲買の破産を取引所が引受けたためである。

そこで、私は、青年の兜町勤務に賛成しない。兜町に勤めたいと云つて、世話を賴んで來る青年がよくあるが、その都度私は反對意見を述べる。

——兜町といふ所は、金と女の外に何もない所だ。さういふ所へ行つて成功するには、よく〳〵堅固な思想を持たなければならぬ。邪念を制するに、並々ならぬ克己心を要する。千人に一人、萬人に一人といふ絶大な克己心を持つ人でなければ、あすこで成功しない。凡人たる君が、さういふ所へ行くのは危險千萬だから止めなさい——と忠告するのである。

中には千人に一人たる自惚を以てあすこへ飛込んで行く者がある。さういふものは必ず失

普通の會社でも、其の經營に思惑をやる者は皆な失敗する。日本製粉や、東洋モスなどは、その適例である。この兩社は、原料や製品の投機買に依つて、利益を得ようとし、實に酷い失敗をした。そして巨額の缺損を出し、見るもあはれな整理會社になつた。

鐘紡が成功したのは、武藤山治氏が思惑をしなかつた爲めだ。氏はあくまで鐘紡を工業的に經營した。製品を賣れば原料を買ひ、原料を買へば製品を賣る。そして極力原料製品の動きから來る損害の負擔を避けた。何處までも、工賃稼ぎに止めた。斯うした經營は、うまい金儲けが出來ない。其代り確かである。少い利益でも繼續して地道に儲けて行ける。武藤氏は、斯うした經營法を實行して鐘紡を大成したのである。

八、運・根・鈍の解釋

古河市兵衛は『成功の祕訣は運・根・鈍』だと言つた。

運が好くなければ、元より成功しない。根も必要だ。問題は鈍である。鈍といふものを文字通り解釋すれば、馬鹿といふことになる。馬鹿では成功しない。然し、馬鹿といふ意味ではない。利口過ぎるなと云ふ意味である。老子は『才子才を恃み、愚は愚を守る。青年の才子、才なきにしかず』と言つて、青年を誡めた。その愚と同じやうな意味である。

運といふことは、時勢の浪に乗るといふことである。時勢の浪に乗れば成功するが、其の逆を行くと、如何に努力しても失敗する。

私が、東京へ來た時、それは今より三十年ばかり前のことであるが、東京市内到る處に牛肉屋があつた。その中にも『いろは』といふのが巾を利かせてゐた。東京市内に『いろは』四十八の支店を設けたので、さういふ名をつけたものらしい。當時は非常な繁昌であつた。

處が、それは時勢の變化に依つて次第に滅び、全部食堂に變つてしまつた。食堂の成功

者は、須田町食堂である。これが昔の『いろは』同樣市内に多くの支店を持ち、『いろは』以上の繁昌をしてゐる。

これを見ると、時勢の變化の恐ろしいことがわかる。

同時にまた大きな成功をするには時勢の助けを借らねばならぬといふ事も能くわかる。

然し、どういふ事業が、時勢の浪に乗つてゐるか、ゐないかを見別けることが、六づかしい。大概、後から見てわかるのである。

三菱は、丸ノ内の土地を買つて大儲けをした。三菱の財産の何分の一かは、あの土地である。然し、三菱は當時丸ノ内の土地が、今日ほど高價になると思つて、買つたのではない。まあ大概よからう位の處で買つたのが當つたのである。

何事もこんなもので、時勢の浪に乗るか、乗らぬかは後でわかるのである。大概は知らずにやる。其處を運よく時勢に助けられる。そして當るのである。

折角時勢の浪に乗つても、福運を逃がしてしまふ人もある。それは不勉強の人である。

金持に學ぶ

不勉強の人は、時勢が助けない。その證據に、同じ事業を經營しても、成功者と失敗者があるではないか。

食堂の例で云へば、須田町食堂は、短期間に非常な成功をした。然し、須田町食堂ほど成功しない食堂もある。中には失敗した食堂もある。それは勉強、不勉強に因るのである。

須田町食堂は、お客のためを思つて、旨い物を安く仕入れて、安く賣つた。お客が澤山來る。儲かる。擴張する。益々儲かる。それで今日の大をなしたのである。

處が食堂を開設しても、一向に勉強しない。まづい物を高く賣る。さういふ店には客が來ない。亡びて了ふ。斯ういふ店も廣い東京には可なりある。

そこで、私は、寧ろ、運は平等だといひたい。食堂は獨り須田町店主にのみ許された特許營業ではない。誰でもやれる。それを經營して成功するのは、人の力である。

『運は平等、それを捉へるは、人の力也』

と私はいひたいのである。

九、辛抱といふこと

私は、先頃有樂座で秀吉の芝居を觀た。

秀吉は信長の草履を溫めたり、乘馬の世話をしたりする。それが非常に熱心で、そのために戀人をも捨てて顧みない。つまり、秀吉は戀人よりも、立身出世を大切にしたのである。そのために秀吉は信長に可愛がられて、非常の立身出世をした。

武藤山治氏は『人一倍の働きをなすにあらざれば、人一倍の人たる能はず』といつたが全く其の通りである。

サラリーマンだつてさうだ。

一生懸命に勤めてゐれば、上役に認められて引上げられる。人並に朝出勤して、お晝に

金持に學ぶ

なると、ぶらつと晝飯を食ひに行つて、二時頃になつて漸く歸へる。そして夕方の退出時間になれば、會社を逃げるようにして飛び出す。さういふ勤め方をして、出世しようとするのは、無理だ。人一倍の勤め方をしなければ、人一倍の出世は出來ないのである。

上役は始終偉い者はゐないかと探してゐるのである。上役に見出されることは、一つの運ではあるけれども、その人に、その資格が備はつてゐなければ運は廻つて來ない。

それから、辛抱といふことも大切である。私は或る太學の卒業生を、自動車會社に世話をした。その會社は澁谷の道玄坂に近い所にあつて、毎晩々々二時か三時になつて、道玄坂の待合から電話が掛つて來る。少しでもおくれると待合の女中から、けんつくを喰はされる。彼は、それで其の勤めがいやになつて、私の處へ轉職の相談に來た。彼のいふには、

『今××デパートが開店しようとしてゐる。其處へ友達が行く。自分も行かれるから、其處へ行かうか』と云ふのである。

それに對して私は斯ういつてやつた。

『まあ、君、辛抱し給へ。勤めは誰でも最初いやになるものだ。そこを辛抱するのが肝腎である。辛抱すれば上役は決して見捨てはしない。殊に辛抱し難い處を辛抱すれば上役は一層認める。君が今の所に愛想をつかして、デパートへ行つた所で、矢張りそこへ行けば行つたやうに不平が起る。決して最初から君の滿足する位置を與へない。さうすれば、また飛び出さなければならぬ。かくては際限がない。其の結果、君は一生安定した地位を得られなくなる』と。

その男は私の言ふことをきいて、そのまゝ辛抱した。そしたら、その後果して上役に認められて出世した。一方デパートへ行つた友達は、その中に出入りの商人から賄賂を貰つて首を馘られてしまつた。

世の中に偉くなつた人は、皆辛抱に辛抱を重ねた人である。

今の鐘紡社長の津田さんが、鐘紡へ始めて入つた時、工場勤務に廻された。朝は何で

も七時頃から出て、夕方七時まで勤めなくてはならぬ。工場付きだから、十二時間勤務である。學生上りの津田さんは、それを耐へるのが辛かつた。そこへ持つて來て上役が意地の惡い奴で、津田さんは遣り切れなく、何度罷めようと思つたか知れなかつたさうだ。けれども思ひ直して辛抱した。さうしたら、結局認められて鐘紡の二代目社長になつた。鐘紡で津田さんほど出世した人はない。今の副社長の山口八左右氏は津田さんが入社した當時、既に支配人になつてゐたのである。それを飛び越しての社長だから、其の出世の早さが察せられる。

東電社長の小林一三氏は、長らく三井に勤めてゐた人だが、二十八九の時に東神倉庫の支配人に拔擢された。辭令を貰つて赴任すると、體が小さくて子供らしいので、其處の連中が受け入れない。それでまた外へ廻された。小林さんは、それを辛抱した。その中に機會の至るのを待つて、今日の電車會社を經營し、今日に至つたのである。その間に忍ぶべからざることを忍んで來てゐる。

王子製紙社長藤原銀次郎氏だつて、一時三井物産の、參事と云ふ閑職に廻された事がある。其の時憤慨してやめてゐれば、王子製紙の經營は委託されない。

斯ういふ風に誰の經歷を見ても、辛抱が附き物である。辛抱なしに、トントン拍子に出世した人は殆どない。

一〇、誤魔化しはきかぬ

事業は一人で出來ない。大きな事業になればなるほど澤山人を使はなければならぬ。從つて大きな事業をやり、大きな事業に成功するには、人遣ひがうまいといふことが必要である。

成功者を御覽なさい。誰でも必ず腹心の者を持つてゐる。その主人のためには討死するといふ者が必ず何人か居る。そして、凡ての使用人も皆能く服從する。ストライキが時々

金持に學ぶ

起るやうな處は、決して成功しない。

次に信義が大切である。

事業家にとつては、事業上の約束は鐵則である。約束を重んじない人は信用されないし相手にされない。そこで約束は命より大事にする。中には買つて置いた品物の相場が下つたから、體よく斷るといふ風に小才を働かす人もある。そう云ふ誤魔化しは一度や二度は成功するが、長續きはしない。後で反動が來て前より惡くなる。

昔、武士は『男子の一言金鐵の如し』と言つたが、事業家の一言も金鐵の如くでなければならぬ。

商賣上のことは一々證文を取つてゐるものでないから、口で約束した事でも、證文同樣に心得て必ず實行しなければならぬ。

昔、兜町に福島浪藏といふ人が居た。此の人は堅い兜町人であつた。その爲めに澁澤さんに信用されて成功した。

『福島ならば確かだ。何百萬圓でも金を貸す』といふほど澁澤さんに信用されたものである。

今の山一の杉野喜精氏もさうだ。杉野氏も三菱銀行に絶大の信用がある。山一が一年に何十億といふ商賣の出來るのは、杉野氏が三菱銀行に信用のある爲めである。杉野氏は金輪際違約はしない。約束をすれば、全力を盡してその義務を果す。昔の福島浪藏氏以上の堅人である。

兜町では昔から呑屋が成功した例がない。呑屋といふのは理窟は旨く出來てゐる。お客といふものは、結果に於て、損をするものに決つてゐる。だからお客の逆をやつてゐれば必ず儲かる。呑屋は、此の理窟の上に立つてゐるのである。

處が、實際は其の理窟通りにならないで呑屋は必ず潰れる。それは自分の店に來る大切の客を粗末にするからだ。客に損をさせて、自分が儲けるとは怪しからぬ次第である。さういふ店が永久に繁昌する譯がない。潰れるのは當然である。

金持に學ぶ

株式仲買も、誠實で、お客本位にして、自分では思惑をしない店が結局繁昌して成功する。

一一、けちといふことに拘泥するな

金持は大きな家に住んでゐる。着物だつていいものを着てゐる。食ふ物だつて、何れかと言へばうまい物を食つてゐる。けれども、何でも物を有効に有効にといふことを心掛けてゐる。無駄な方面に金を出さぬ。而も家は立派だ、着物も綺麗だ、食ふ物は贅澤だといふが、金を持つてゐる割合からすれば質素なものである。

乾新兵衛といふ人は、毎朝起ると薪を割つた。これは無論經濟よりも身體鍛錬のために相違ない。しかし、同じことでも、ラヂオ體操をしてゐるよりも薪を割つた方が幾らか經濟である。宿屋へ行つても茶代は碌々置かなかつた。

先代の淺野總一郎さんなんかも、それに共通點があつた。あの人は決してけちな人ではなかつた、けれども今の人から見ると茶代の置き方は少なかつた。

金持は人がけちと言つても、自身はけちと思つてゐない。自身でけちと言ふのは福澤桃介さん一人位のものだ。福澤桃介さんは俺はけちだ〳〵と言つてゐる。さうでも言はぬと寄附攻めに遭うて堪らないからであらう。

人はけちと言つても、金持自身は節儉と思つてゐる。節儉は見方に依つてはけちともなり、しみつたれともなる。其の區別は容易につかない。人が何と言つてもよい。物を大切にして金を溜め、國家の産業に盡すべきである。金持は皆な之をやつてゐる。我々はそれを學ぶ可きである。（終）

◇編輯だより◇

◇一九三六年の年頭にあたつて、まづ愛讀者各位の御健康と御多幸を祝福致します。

◇本年最初の一冊、石山賢吉氏の『金持から何を學ぶべきか』の問題。最も興味あるものであります。

◇石山賢吉氏は御承知の通り經濟雜誌ダイヤモンドの社長として、斯界稀な人格者です。

◇昭和十一年は、パンフレットの內容を一層充實にし、最も權威あるパンフレットを提供して行く計畫であります。毎月平均三冊發行、これさへ讀んで居れば、時局に對する認識に後れをとることはない、新聞でも雜誌でも得られぬ知識が、早く正しく得られるといつた所にパンフレットの特長があります。切に各位の御愛讀を御すゝめ致します。

◇パンフレットは毎月三冊發行です。直接購讀を希望さるゝ方は、ハガキで本社直接御申込下さい。

金持に學ぶ　定價十錢

(No. 42)

昭和十一年一月十五日　印刷
昭和十一年一月十八日　發行

著者　石山賢吉

（不許複製轉載）

發行兼印刷人　伊藤隆文
東京市芝區田村町四丁目十八番地

印刷所　三陽堂青野印刷所
東京市芝區田村町四丁目二番地

發行所　今日の問題社
東京市芝區田村町四丁目十八番地
電話芝（43）三〇〇七番
振替東京五九七四八番

取次
東京圖書雜誌會社　鐵道保護會（鐵道各驛ホームス ンド一手販賣）
鐵道弘濟會・鐵道援產會
大森書房・富章新聞店
啓愚社・上田屋
新正堂（大阪）
川瀨書堂（名古屋）

◇刊行書目◇

陸軍省海南班清水少佐著 近代國防とソヴェート・ロシア 定價十錢(送料二錢)
陸軍省パンフレット收錄 經濟戰略・思想戰略 定價十錢(送料二錢)
古澤磯次郎著 海軍軍備會商決烈せば? 定價十錢(送料二錢)
秋定鶴造著 政局はどう動く? 定價十錢(送料二錢)
松山二郎著 農村はどうなる? 定價十錢(送料二錢)
高橋亀吉著 インフレーション下の金融財政はどうなる? 定價十錢(送料二錢)
阿佐陸夫著 景氣は廻る 定價十錢(送料二錢)
海軍省梅崎中佐著 列國の動向を探る(絶版) 定價十錢(送料二錢)
陸軍省パンフレット收錄 ロシアは如何にして極東に迫るか 定價十錢(送料二錢)
陸軍省パンフレット收錄 重歷下の日本と國防の强化 定價十錢(送料二錢)
阿子島俊治著 內閣審議會とは何をする所か 定價十錢(送料二錢)
蓑田胸喜著 天皇機關說を爆破して國民に訴ふ 特價二十錢(送料二錢)
永松浅造著 滿洲國皇帝を語る 特價二十錢(送料二錢)
松下芳男著 軍部前線に躍る人々 定價十錢(送料二錢)
野田雲著 株式界の前途 定價十錢(送料二錢)
補公研究會編 寶大楠公の遺訓書 定價十錢(送料二錢)
曾崎翁著 運に乘る法 特價二十錢(送料二錢)
蓑田胸喜著 一木枵拇牧野內府 僞書思想を糾彈す 定價十錢(送料二錢)
松下芳男著 軍部を裏から覗く 定價十錢(送料二錢)
國防研究會編 列强は如何にして支那を食ふか 定價十錢(送料二錢)
小林住男著 軍部の系派・動向(絶版) 定價十錢(送料二錢)
高橋是清著 處世一家言 定價十錢(送料二錢)

今日の問題社
東京市芝區田村町四の一八
振替東京五九七四八番

◇刊行書目◇

藤田信道著 東京附近夏山の旅 特價二十錢(送料二錢)
野田雲著 有價證券投資・利殖の必携 定價十錢(送料二錢)
永松浅造著 豐太閤の處世術 定價十錢(送料二錢)
松下芳男著 林銑十郎と眞崎甚三郎 定價十錢(送料二錢)
村田清太郎著 重臣ブロックの正體 定價十錢(送料二錢)
菅原節雄著 陸軍の智腦九人男 定價十錢(送料二錢)
金子堅太郎著 日本憲法の精神 定價十錢(送料二錢)
松下芳男著 川島義之と渡邊錠太郎 定價十錢(送料二錢)
小林順一郎著 軍部と國體明徵問題 特價十錢(送料二錢)
小林知治著 ジヤクソン式强體健康法 定價十錢(送料二錢)
三島康夫著 制裁下のムツソリーニ沒落か 定價十錢(送料二錢)
松下芳男著 荒木貞夫と阿部信行 定價十錢(送料二錢)
片倉藤次郎著 日本はイタリーを支持して英米の壓迫に備へよ 定價十錢(送料二錢)
長谷川了著 裏から見た歐洲の外交戰 定價十錢(送料二錢)
村田孜郎著 北支獨立運動の眞相 定價十錢(送料二錢)
林勇造著 政局線に於ける軍部の動き 定價十錢(送料二錢)
天沖鄕廟著 蔣政權の行方と迫れる日英戰爭 定價十錢(送料二錢)
小泉二十著 外交陣をめぐる軍部と外務省 定價十錢(送料二錢)
久原房之助著 國體宣揚と重臣ブロック 定價十錢(送料二錢)
經濟問題研究會編 サラリーマンは何處へ行く? 定價十錢(送料二錢)
三島康夫著 日支衝突必然論 定價十錢(送料二錢)
石山賢吉著 持に學ぶ 定價十錢(送料二錢)

今日の問題社
東京市芝區田村町四の一八
振替東京五九七四八番

○既刊書御注文は、すべて前金にて御願ひ致します。御申込は本社直接又は最寄書店へ。
送金は振替又は郵便切手のこと。

大藏大臣 高橋是清 著

半生の體驗

萬人待望の高橋是清翁體驗錄愈々出づ!! 空前の人氣本書に殺倒!

なぜ本書は熱狂的に歡迎されて讀まれるか？ それは單に翁が日本の國寶的存在であり人氣男であるばかりではない。高橋翁の生ひ立ちこそ、吾々が、とつても處世の範とすべくあまりに打つてつけだからである。しかも翁の生涯こそ、一介の足輕の子から人臣の榮を極めた人生記錄であり、些かの暗い面を持たない尊敬すべき一生であるからである。

本書を是非讀んで頂きたい人々は

銀行會社員
官公吏職員
青年學生
教育家並實業家
母親はもとより一般女性
兒童を敎へ導く兩親、教育家、人を使ふ立場にある人、今後何事かをなし成功せんとする人は特に讀まれよ！

◇一月二十日發賣、各書店、驛賣店、新聞スタンドにて發賣！ 賣切れぬうちに求められよ！ 四六判百頁・清裝・定價金二十錢（送料六錢）

東京市芝區田村町四の十八
振替東京五九七四八番

今日の問題社

これならキツト成功するといふ「法」

世に所謂成功法といふものが傳へられてゐる。或は新聞に、雜誌に、更に仰々しいのは、數百頁の單行本にまでして出版されてゐる。誠に結構なことである。しかし成功法と銘打つて『法』といふ字を用ひてあるからには、それを讀めば必ず何人でも成功しなければならぬ。其の人の能力に應じて……。

だが幸か不幸か、つぶさに檢討して見るに、大方は『成功出來ない法』が多い。出來るとしても、實行出來んやうな『法』である。『金儲け法』だつて同じことだ。第一『法』とか『術』とかいふものが成功不成功、金儲けにあつてたまるものではない。あると思つたら大間違ひだ。

但し、こゝに唯一つ『法』といへば、言へるだけの格式ある『法』がある。それは何か？ 一介の足輕の子から身を起して、波瀾、曲折、あらゆる苦難を泳ぎ切つて、今日では、國寶といはれ、人臣の榮を極めた高橋是清翁が、その體驗より割り出された訓話である。これこそ『法』と稱すべき價値あるものだ。其の著『處世一家言』（定價十錢送料二錢）及び『半生の體驗』（定價二十錢送料六錢）を讀めば何人にも分ります。

大藏大臣
高橋是清翁著

處世一家言

四六版・定價十錢（送料二錢）

一代の苦勞人、當代の人氣男、高橋是清翁が現代サラリーマン、青年學生に向つて、處世の要訣を、嚙んで含めるやうに、じゆん〳〵として說かれた、出版界稀に見る處世の名著である。生れ落つるや波瀾の中に自己を築いて來た翁の貴重なる體驗より出づる一言一句、誰が讀んでも、自己を刺されるやうな味ひてある。各會社、官廳、學校、青年團等では、修養の良書、心構への指南書として、絕大の贊辭を賜つてゐる。是非一讀すべき書である。

發行所　東京市芝區田村町四丁目十八番地
振替東京五九七四八番・電芝三〇〇七番　今日の問題社

村田清太郎著　**重臣ブロックの正體**　重臣ブロックとは何をいふか？　本書は此の問題に對する正しい解說を與へたものである。　好評二十版　定價十錢（送料二錢）

金子堅太郎伯著　**日本憲法の精神**　機關說排擊、國體明徵が叫ばれてゐる今日、金子伯爵の憲法精神の解釋は不朽の文獻である。　好評五十版　定價十錢（送料二錢）

林勇造著　**政局線に於ける軍部の動き**　岡田內閣の危機と軍部の動きを誰にも分るやうに書かれた新刊。　新刊忽ち重版　定價十錢（送料二錢）

天沖鄕廟著　**蔣政權の行方と迫れる日英戰爭**　支那幣制改革の裏に躍る英國の陰謀と日英關係の急迫！　新刊　好評　定價十錢（送料二錢）

村田敎郎著　**北支獨立運動の眞相**　北支いよ〳〵獨立せんとす！　自治運動の眞相と日本の立場を知れ！　好評十五版　定價十錢（送料二錢）

小泉二十著　**外交陣に於ける軍部と外務省**　行方不明の觀ヶ關！　なぜ外務省は無能と叫ばれるのか？　新刊　定價十錢（送料二錢）

東京市芝區田村町四の十八
振替東京五九七四八番　今日の問題社

不思議なサイコロて

野球が實戰そのまゝ遊べる
超モダンポケット野球

ポケット

全國野球界に
壓倒的大流行！

全國書店、文房具店、驛賣店にあり

～定價 十錢～

東日本一手販賣元
森田書房
東京麹町有樂町二ノ二
振替東京四二五一二

京阪神一手販賣元
新正堂書店
大阪北區堂島上二ノ二五
振替大阪五〇二九一

中國・四國・九州
一手販賣元
森田書房西部支店
大阪府豐中町櫻塚一一〇六
振替大阪五六一六四

東京市内で一番よく賣れる

讀賣新聞

東京銀座 讀賣新聞社

朝刊十二頁
夕刊四頁
（但水曜土曜は八頁）

時代に應じた藥と感服

陸軍中將　堀内文治郎閣下

年のせいか、近來少し無理な仕事をつゞけると、頭の調子がどうもはつきりしない。仕方がないので頭痛藥を用ひて見たが、腹工合を惡くし、食慾に障るので困る。そのため、餘程不快の時でないと服まないことにして居るが、友人に「はれやか」を熱心に勸めるものがあり、從來の頭痛藥と五十歩百歩の考へでゐたが、頭の榮養になる藥だといふので、一週間ばかり續けて服んで見た。なる程爽快といふか、明朗といふか仲々頭の調子がいゝ。それに、便通が非常に良くなつて大變心地がよい。世の中が進んで來ると、必要に應じて良い藥が考へ出されるものだと、感心してゐる次第である。

因に「はれやか」は胃腸や心臓を害ひ勝な一時的頭痛類とは異なり服めば腸のむ程頭に一番大切な病、カルシウムの榮養分を補給して、頭の病氣を病原から治癒に導く效も遙んだ頭の藥で專門家や頭を使はれる方々から推奬されるのも故なきではありません。

東京・銀座元貴　日獨醫化學研究所

かゆれは

時代に應じた藥と感服

陸軍中將　堀内文治郎閣下

年のせいか、近來少し無理な仕事をつゞけると、頭の調子がどうもはつきりしない。仕方がないので頭痛藥を用ひて見たが、腹工合を惡くし、食慾に障るので困る。そのため、餘程不快の時でないと服まないことにして居るが、友人に「はれやか」を熱心に勸めるものがあり、從來の頭痛藥と五十歩百歩の考へでゐたが、頭の榮養になる藥だといふので、一週間ばかり續けて服んで見た。なる程爽快といふか、明朗といふか仲々頭の調子がいゝ。それに、便通が非常に良くなつて大變心地がよい。世の中が進んで來ると、必要に應じて良い藥が考へ出されるものだと、感心してゐる次第である。

因に「はれやか」は胃腸や心臓を害ひ勝な一時的頭痛類とは異なり服めば腸のむ程頭に一番大切な病、カルシウムの榮養分を補給して、頭の病氣を病原から治癒に導く效も遙んだ頭の藥で專門家や頭を使はれる方々から推奬されるのも故なきではありません。

東京・銀座元貴　日獨醫化學研究所

かゆれは

終